



芭蕉翁行狀記



~ 5
1937



芭蕉翁坊狀記

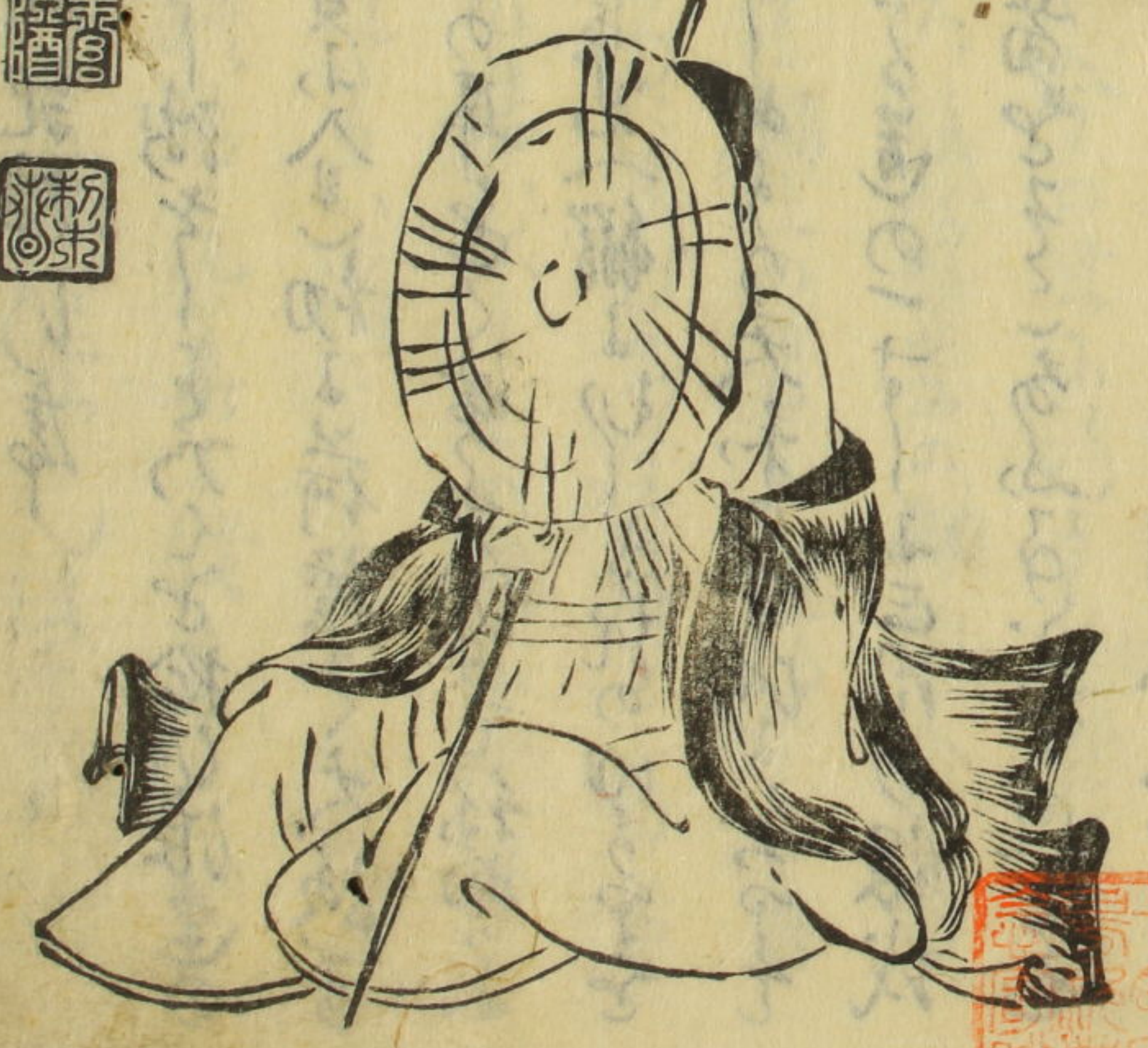
全



5
1937
卷

生千武心安英
勇之傍中間為
文雅之侃瞻望
乎六十州而
見瞻至於六十
州翁之前後
有乎否

后臥者識



興津氏



芭蕉翁の日記抄の序

詩小の和歌も詠一紙をとりて乃と拾ひ浪連の
藻屑かきあつめて篋に入し初は荷擔く大坂の
泚苔を賣れい兒女の耳をく穿ふ人ありて秘傳ふ
ひととりのまづつうひを覺へ縮むむき此のゆるきを
來すされん天文のちめりり天和の中はよむを
我祖芭蕉翁かひひく道の一すふ正風の眼找
ひくたそくさ乃その苗をそこあふむとたそしる毛
のむ色と春集ふ事とをゆるこしめて鉄氣檀林と

勅破一ひひ冬の日ふ未未乃正意をよみよ
夫の日乃光あましく今の世ふけりの泚苔全
翁の髓腦を出しその後終業の御門人路通
三井の精舎ふあつて湖上の月を觀る一古
り快記一帖を著しそのたりむき生産とあま
獲麟ふるそ乃文尤悲む一その間ふの
くろ白くを正一かられらへほさよ翁ふ存問ひ
一とつふ記をり松枯尾の毒も洩くは福の
泚苔いこの句とく載る不じは書棧ふ

ゆめて世よとくさるゝと久しきと喜
却の書肆能本氏の何某正本とひめ
と今さう梓しして弘く世に及ぶ
意一予ふる乃序をとらふ家上の
えくる船舟の心と辨する。及
類とゆゑに記す。帯に意す
め。

硯田舎紀逸述



行狀記

芭蕉老人ある伊賀國上禁よのり
武士のあはれに侍りて福を
つゝはるるに思ふに
海濱てをかくし親を
あつと甲斐守の命の
乃聲をあらうる
中比より住新を
めく御程なる

しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし

之録七年の巻十一先きなるのち後年(雜考の
解もあつて)は漢を著ししるしと道書くしるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし
しるしと道書くしるしと書麻のるふ人としるし

かきつばたの葉は青く花は白く
よもぎの葉は青く花は白く
追ひつかまはけは花は白く
麦の種を後にはりかかると
若根の爛起て

田舎の歌
かきつばたの葉は青く花は白く
よもぎの葉は青く花は白く
追ひつかまはけは花は白く
麦の種を後にはりかかると
若根の爛起て

かきつばたの葉は青く花は白く
よもぎの葉は青く花は白く
追ひつかまはけは花は白く
麦の種を後にはりかかると
若根の爛起て

在旅に試みるに

是より伊勢海より
江上木曾塚の麓は
宇治山伏も久し
松本

廿日之想乃願とて

一也之の心樂に杖也と云々あり
此を云ふは白ゆきとてしるしとて書
の反古と云ふはのあはれ後の形と云
乃細道公馬集と云はくおれ一氏の
可にあり者云はく小業月とて一
道と云ふはのあはれとて書
惟然支考が云ふはとて達と云ふ
かゝるまに女と云はく一とて

あはれとて云ふはのあはれとて

業の重なりと云ふはのあはれとて

名も自とて云ふはのあはれとて

と云ふはのあはれとて

と云ふはのあはれとて

信をのくに師と云ふはのあはれとて

と云ふはのあはれとて

福も云ふはのあはれとて

と云ふはのあはれとて

此種とやら

す

弁賣のふ

津堂月に入ると年比の繁盛の西京
都又起て堀くみかきり不喰物印すき
と海はのちひとくし甲斐が京大津
徳前よりさし海をかくくを集る本歌
習の力とくしあり一廿外様
とさくしとくしあり一廿外様の

かろ人に賀の句は
吟河柴

精又をん

時ほもつ日移さるるものも
のちかかおのちかか
備あまのちかか
本堂様
情

乙卯致して卯建ち昔ながらくくもさうの原
りた終る十二日正念にして終る終る終る
三十年の所難難波の苦なりなり〇の事を
うと終るなりやうとせよとせよとせよとせよ
かしき言終る業度から無しの事終るなり
毛のはあゆみなりとせよとせよとせよとせよ
言局息あとの事くくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくくくくく
すくくくくくくくくくくくくくくくくくく

其寺の種くくくくくくくくくくくくくく
凡の関は馬かくくくくくくくくくくくく
昌房探志くくくくくくくくくくくくくく
伊賀よりくくくくくくくくくくくくくく
臥路の旅亭くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
業津義仲寺にくくくくくくくくくくくく
せくくくくくくくくくくくくくくくくくく

かゝるものもあらずとて

なれは後世にたゞの傳へたる

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

身はかゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

かゝるものもあらずとて

たゞの傳へたる(たゞの傳へたる)

法實おの觀也や一一人間の歩むはらひ
 其にほきとて情をこころをわらひ
 速いそふもゆるもあつて古人の心は
 りる春まはるもあつてあつてあつて
 かくのこころもあつてあつてあつて
 去るも現もあつてあつてあつて

元禄七年冬於湖上三井寺綴此記

小沙弥
 路通謹書

翁二七日十月廿九日會

追善各集栗津義仲寺諸真愚上人設齋
 不がさつや通あつてし給ふ塚の産 路通
 神しんりり身みは二七日 位 乙州
 眼目の清子外うりり寺てらのしん 木節
 舟ふねのしんりり寺てらのしん 土竜
 舟ふねのしんりり寺てらのしん 卓袋
 舟ふねのしんりり寺てらのしん 木志
 舟ふねのしんりり寺てらのしん 正道
 舟ふねのしんりり寺てらのしん 如行

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

丹野

唐のよと隔るにふさふさのり云 木節
 小栗挿ふとよふと中なる株の障 生芳
 報は丹野あゝるえ計のくく 貞袋
 荷の幸好よか海の時をば 丹野
 知くはさしとちあけて中務り 固 如行
 乙州
 木節

唐のよと隔るにふさふさのり云 木節
 小栗挿ふとよふと中なる株の障 生芳
 報は丹野あゝるえ計のくく 貞袋
 荷の幸好よか海の時をば 丹野
 知くはさしとちあけて中務り 固 如行
 乙州
 木節

我の奥後延思おかしき心は神を
しりて一七二七日義仲寺より進言こ
七日信仰久草をむらさき像のよきかして
人し句をよししきおのしりかひま
清く杖を二十指七文の風 乙州拜
穀婦形も本寺流武蔵郡 木節
先き出た奥の竹軸やみえり丹 惟然
立とふおた替中もろく玉あし 土竜
像の画はおいおく流寒きは式 智月

穀多れ給くからしりかひま
此給よりこしは御教座の上 丹野
こ給のしめ事しりておの像 路通

四七日翁頭陀笠杖寄進義仲寺公題

三物有句

此星はいくばの年はきりり水 木節
は涯をこしりやさしり路通 路通
是かよの路路は月言きみり流 土竜
藤のしりたふさの夜言きまのしり 乙州

三葉あやの江林の種杖乃杖 峩々
 夜ももろしるるの海江の星の標 丹野
 唐くると立ぬ紅標より空の佛 高近
 みこのりや者よりかこのかす小立 智月
 高小ては持くく一よりお星のま 本志
 山茶をややるにいで杖乃の殿 惟然
 初月忌ありのひくの追書とくすは両吟 嵐聖
 兩月の案にお扱は打録り案 乙州

又らお聖余といふも何鳥 木節
 食とましく物と何は分て
 春ののり標をたへや標お
 月の夜とりかひ言の書本の下
 は首て降は小標の難い
 子乃おふよ一葉とふくく九標の案
 此のまお木の標久ははまの初
 るをたお聞は八町はおるや
 答とありののりくま一葉の案

今依又乃具葉は固結しけり
 激刃
 火とて狐也おかしき物也と山
 嵐雪
 女片候名をそかぬまふ
 探芝
 浦赤いそ形神乃素より又と傳
 廻息
 一傳あつくと言ふまふ
 遅塗
 海くぐり櫓舟の報乃に海舟とて
 惟然
 あつりのの海に道は切土
 文竹
 色の多乃小海老と云ふく好
 昌房
 くも(送)入くも(送)入
 去来

老書よかきとせとて
 重
 半分少のあつた有る
 正秀
 昔のあつたは信候のそに
 成高
 女とてあつたは
 朴吹
 空也とてあつたは
 智月
 海とてあつたは
 廻息
 指のあつたは
 嵐雪
 海とてあつたは
 路通
 海とてあつたは
 木節

遅望
 探芝
 惟然
 文竹
 激刀
 者水
 乙別
 去来
 正秀

一挺入りむも電よぬいららるる句
 嵐雪
 遅望
 惟然
 激刀
 土竜
 枕隣
 成高
 乙別

敷き河小川うひ葉さ

桃隣

①おろしはそきくはと清く

嵐雲

ひて粥とさるるの日

執筆

六七日路通亭一座真行

ぬと壇乃露きさひり移され

土竜

あとの月おのりおおきく紅紅

智月

空はは厚なる雲塚乃ズン

乙州

粟津基や塚さく新乃るる

正道

大極の輪は溜よりり塚乃露

木節

厚く木もおびりては佛に

路通

空下は松も九人の教も時

桃隣

盡七日反言けし

枯枝は陰奥なるはみりる

路通

嗟とくするちのくもは木

智月

かたさうは難波くくやみの根

土竜

くく死也松のはきんばる

乙州

葉の更や大喜小喜るる

木節

追悼

追悼のついでに集むるもの
おのゝついでに集むるもの

つよまをとおりのとち吹死さ乃旅
魚んらん枝さのささし一候佳牌
是孝公教不断櫻乃又さ好を
あもむくの唱ほい海原ささ
一高る海しとらう新の事種
那もいさもさ孝公相女枯葉美
あもむの塚乃さほひや松は美
木さる塚の木かし一解あさる鳥

翁雅波より海原の葉乃ささし一候佳牌

智月

錦江

北枝

万子

保直

江水

巴水

ノ松

羨美もえ流の美乃移也さ乃表
塚さむし一舟さささし一候の波
散くくくくくくくくく柳陰
身お人のささ乃安や自然さ
木の枝さ塚乃ささささ塚の完
末朝ささささささささささ
孫香の種もせり葉文さ乃受
ちささささささささささ
梅ささしささささささささ

大和今井

大津

全

三井

大津

全

全

全

全

全

葉文

乃胡

鳥白

芦吹

安世

心流

江山

露玉

丹野

東の人の足跡より野の雪 大津 路外
 誰りりたててはるかに暮れぬ 合 大武
 大なる海原の鳥の鳴くは塚の末 全 百々
 昔の牙やさしの歯のささるはたぬ 全 夏白
 昔の心と静かなるはけしき 大坂 五季
 昔のけしきと静かなるは 大坂 何処
昔の海原の鳥の鳴く
菴のこゝろ
 昔の心と静かなるは 大坂 何処
 昔の海原の鳥の鳴く 京 路静

昔の心と静かなるは 加々小松 塵生
 昔の海原の鳥の鳴く 全金沢 牧童
 昔の心と静かなるは 中羽酒田 不也
 昔の海原の鳥の鳴く 越中石動 宇白
 昔の心と静かなるは 寂上 羅備
 昔の海原の鳥の鳴く 駿河葛田 如竹
 昔の心と静かなるは 全 如舟
 昔の海原の鳥の鳴く 加列 三十六
 昔の心と静かなるは 全 南車

推の是乃塚とてりる所也
加州 旭江
 而形も者かき後のも乃皮
三ノ大垣 周来
 之くれ日の茶湯も乃皮
全 斜嶺
 葉虫も木にけりる所也
全 残香
 福清て書も乃皮
加州 怒風
 字も乃皮も乃皮
全 了傳
 枯くも乃皮も乃皮
全 十進
 乃皮も乃皮も乃皮
全 文川
 枯茶の代も乃皮
全 頼光

此乃皮も乃皮も乃皮
全 岡水
 初乃皮も乃皮も乃皮
京 短長
 乃皮のよも乃皮も乃皮
三ノ 均水
 乃皮も乃皮も乃皮
ギフ 白嶺
 乃皮も乃皮も乃皮
三ノ 夕可
 いぬ人も乃皮も乃皮
全 竹堂
 乃皮も乃皮も乃皮
定光坊 實永

右一卷栗津義仲寺校考六

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, located at the top of the page.

Main body of handwritten text in a cursive script, consisting of several lines of entries.



三三三三三

Handwritten text at the bottom of the page, including the characters '十' and '十'.

Small handwritten mark or characters near the top edge of the page.





